



9月4日の講演会では石川九楊氏をお招きし、創造することや自作についてお話いただきました。その様子を一部ですが紹介いたします。

今回メゾチントという技法を初めて知ってなかなか面白い世界だと興味を持ちました。暗闇の中からさくらんぼやレモンが姿を現している。非常に不思議に思ったのは球体が多いことです。私なりになぜ浜口さんがそういう表現なのか考えると、このメゾチントという技法自体がそこへ誘導していったと思います。メゾチントの特質が一番生きる世界は何かというとはつきりした光と影ではなく中間のところを微妙につないでいくグレースケール。つまり球体を浮かび上がらせるのに適した技法です。浜口陽三はメゾチントそのものに誘われていった、「メゾチントの人」であったと、そんな印象を持ちました。

「かく」とは、「欠く、掻く、画く、描く、書く」こと

浜口陽三のメゾチントと私の書とは、一見関わりがないようですが、「かく」表現として、深い共通点をもっています。メゾチントは、ベルソーによる目立てでいったん暗闇の世界をつくる。そしてその目を、スクレップパーで削り、バニツシャーで磨くことによって光を招き入れる。書は、繊維の目立つた紙を墨の含んだ筆で目潰しすることによつ

て、光の届かぬ陰翳をつくる。

我々は普段「絵画」「版画」「音楽」「書」などと分類していますが、人間が作る以上、人間の動き、動作、行動、動詞で定義づけるのが一番はつきりします。人間の行動は大きくは、「かく」と「はなす」に分けられます。

「かく」というのは、筆やベルソー、あるいは家庭の主婦の包丁、農夫のもいですが、人間が刃物を持って間接的に世界と対することです。「はなす」というのは動作や声など、自分の身体から直接的に意識を外側に出すことです。打楽器というのは間接的なのでかく方です。人間がつくるというのは刃物(筆、ベルソー、道具)を持って世界に傷をつけ変形させることです。

創造というのは対象(世界)に傷をつけ、祈るといふことから元々できていた言葉です。傷をつけるということとは人間の原罪です。人間が人間と生きていくためにはやはり傷をつけていくしかない。だが一方でその罪に対する贖罪の祈りというものも忘れてはいけません。かくとはなす。人間というのは直接と間接で同時にものに触れる。それゆえ人間は「目で触れ、手で見る」ことができるのです。

力動の芸術「書」

一方、書とメゾチントの決定的な違いのひとつに力動ベクトルの重要性の有無があります。書というのは力と方向が決定的な意味を持っています。「一」という字を書くとき左から右に書く場合には、引く力がはたらきます。逆に右から左の場合

「浜口陽三・石川九楊二人展 光の消息」関連イベント
講演会「点と線、点と画の思想」
講師 石川九楊【書家・京都精華大学教授】

合には、押す力がはたらきます。押す力と引く力はまったく違う世界ですから、逆版を原版とする銅版画で書の世界をつくることは至難です。このように力動に生命をかけていくのが書です。その表現の幅をどう広げるかに私は一番初めに取り組みました。みんな同じようにじみとかすれで書いている従来の書に対する疑問を感じ、その世界から抜け出すために、動かない筆触、動いた跡を見せないで静止しているように見える書を書くことはできないかと思い、試みたのが私の書の出発点でした。

今回展示している作品は二〇〇八年に源氏物語が一千年紀ということで、かつて一度シリーズで書いたものに再度取り組み仕上げたものです。それをどのように見るかはみなさんの自由。自由に見ていただいで、ご感想いただければ幸いです。

……後半の『一問一答』のお時間には、参加者から様々な質問にお答えいただきました。……

① 今回源氏物語は壮大な作品ですが、制作の過程で飽きたり、迷いが出たりしないのでしょうか。どのようにモチベーションを保ちますか。

● 源氏物語書巻とタイトルにしてますが、書でも、どんどん場面が変わっていくドラマチックな表現ができないだろうかと思って書いたものです。飽きることはなく、いつまでもやっていきたいくらい。ただ、疲れることはあります。この作品で私の寿命は十年くらい縮みました(会場笑)。疲れた時そこを突破するには風呂に入るか寝るかです

ね。一日に四、五回風呂に入る時もあります。

② 一つの作品にどのくらい時間がかかりますか。

● 一日で出来る時もありますが、大抵は数日かかります。「源氏物語書巻」の場合は二〇〇八年一月からはじまって八月の中旬までかかりました。他の出版などの作業は全て止めて取り組みました。

③ 音や色彩に対しての興味はありますか。

● 書というのは声を発しますから、是非見るときにはその声を聴いてください。自分もその声と対話しながら書いていますから。私が誰かの作品を見る場合でもやはり声が聴こえる、それを聴こうとします。書の一点二画の書きぶりの中に声がついていきますから。

それから色彩、色の世界は非常に難しいですね。色をどう使うかというのは実際のところ私はよくわからない。東アジアの色彩は西洋の色彩と違って、それぞれ



意味を持っていく。墨の黒は、美術の時間に教わるような色ではなくモノクローム、光と影の影色

です。モノクロームの世界とは別に、色彩の世界という想定をした時に、東アジアでは一番上に赤があり、これと対称的に青があり、その他の色が下にある。こういう構造です。特に赤は特権的な色で、だから判子は赤で押します。西洋の色彩と

④ 判読の手がかりは何ですか。あるいは、判読できなくても、筆触(筆づかい)、墨の濃淡、線などを鑑賞できればよいのでしょうか。

● 墨の濃淡、筆づかい、線、それはいわゆる書道界的な言い方で、まずそこを出ないといけない。一点一画をかいて言葉に変えていく行動をどういう風に追いかけていくかです。「なぞっていく」ということが生命ですね、筆触というのは。墨の濃淡や筆画の長短などではなく、かいていく中で何が働いているかということになぞっていくことで立ち会っていただきたい。私の作品に書かれているのは線ではなくあくまでも文字の字画です。のびている線のようであっても線ではなくて一画です。

なぜ「ま」や「き」の一画がここまで馬鹿馬鹿しくのびているのか。この作者は一体何に耐え、何を欲しているのかということ、なぞってあげれば、その作品の方から口をひらいてくれるでしょう。私自身も、改めてなぞってあげれば自分が気づかなかつたことが違つかたちで見えてくるだろうと思います。